

大粒ダイヤの行方―芸者が一役

この時代の異常ともいえるダイヤモンド人気については前で述べたが、ところで、ダイヤモンド、特に大粒のダイヤの多くはいったい誰が買ったのだろうか。

『宝石百年』(第二部)によると「何といっても株や船の成金一派、富裕な華族上層階級か、一流の花街方面かがいが、その主たる得意先であった」。

大戦景気の時は花柳界かりゆうかいの繁昌が絶頂に達した時期である。当時は多少の社会的地位にあるものは、連夜、料理屋や待合茶屋で豪遊することが増えた。待合茶屋とは客が芸者などと遊ぶところ。ここでは芸者は社交上必須のものとされ、花柳界は大いに栄え、その勢いは絶頂に達していた(『近世日本世相史』)。

成金たちはこうした場所に頻繁に出入りしていた。そのため、ダイヤは自分の妻や娘のために買うこともあったろうが、馴染みの芸者にわたったものも多かったと思われる(図1-2-43)。



図 1-2-43
大正期の芸者遊び
Wikipedia より

ダイヤの背後には芸者がいたことは当時は常識だったようで、大正時代の流行歌「コロツケの唄」（大正六年）の三番にも次のように歌われている。

「芸者が嫌なら 身受けしてやる
帯も買ってやる

ダイヤもやろう やろう
今日は三越 明日は帝劇

いふて呉れるやうな客がない

アハハハ アハハハ

こりやおかし」

（コラム117）

新橋芸者に入れ込んだ歌舞伎役者

当時の贅沢な消費を物語る実話もある。十五代目市村羽左

衛門えもんといえ大正から昭和初期の歌舞伎を代表する役者の

一人。羽左衛門は艶福家としても知られ、芸者衆にもてた。

大正初期頃、羽左衛門は新橋の「くみ子」という芸者を好きになった。羽左衛門が色ぼけになったようだ、その頃の新聞に書かれるほど入れ込み、「けう（今日）は三越あしたは帝劇」という標語が三越デパートの宣伝部で考案された頃のことだった。羽左衛門こそ、けう（今日）は三越あしたは天賞堂という風ふうに相手をつれてほしがるほどのものを買ってやった」（『東京おぼえ帳』^⑳）という。天賞堂で買ったものが何かは具体的には分からないが、ダイヤなどの装身具を相当数買ったであろうことは想像に難くない。

天賞堂でも、「羽左エ門はいいお得意様だった」（『青山雑記』^㉑）といっている。

成金ばかりでなく、羽左衛門のような役者も高級貴金属宝飾店の有力の顧客であったことを示すエピソードである。

ダイヤとプラチナの絶妙の相性

この時代にはダイヤの台座としてプラチナが盛んに用いられた。

明治期にはダイヤは金枠に入れられることがほとんどだったが、この時代は断然プラチナの枠に入れられることが増えた。

ダイヤとプラチナの相性の良さは、一言でいえばダイヤはプラチナ枠でこそ白色が一層引き立つということである。

この点につき、『ダイヤモンド』の著者岩田哲三郎は、「ダイヤモンドを嵌装する材料として白金が遙に金に優る特徴を有してゐるのは疑ひなき事實で、殊に純良なる白色石に對して金を使用する時は必ず不成績に終る」と断じている。

プラチナも芸者が開拓

このプラチナ普及の功労者も芸者だった。美に對する見識が高く、身を飾るものに目が肥えていた芸者たちは、地味な輝きながら趣味の良さをアピールできるプラチナ製品を好んだ。

当時の事情をよく知る田中貴金属社長・田中一郎は、日本のプラチナ需要の特徴について、次のように述べている。

「当然ながら昔の芸者には退職金制度がないので、若くてきれいなうちはいいが、老後に備えて蓄財しなければならぬ。しかし、相手の男達にお金を求めることは、いやしい行為であり、結局、換金が容易な貴金属装飾品をねだる慣習となつた（中略）金製品もあつたが、それよりもかなり高価で、しかも目立たないプラチナ製品が好まれ、かんざし、帯留め、指輪などを身につけて芸者がお座敷はもちろん、芝居などを観劇、これが上流婦人階級にも普及していった（中略）日本人はいわゆるキンキラキンの成金趣味より控え目で、それでいて高価なプラチナを選択した」。

これは日本女性のプラチナ好きの社会的背景を深く知る上での貴重な証言といえよう（『プラチナの魅力』^{③⑨}）。

なお、芸者がダイヤやプラチナの需要を支えたというと奇異な感を受ける人も多いと思うが、これはそれほど不思議なことではなく、ヨーロッパ社会でも事情はほぼ同じだった（コラム11219）。

恋愛と贅沢品―ヨーロッパと日本

1912年に書かれたゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』^{④⑩}によると、資本主義経済を回してきたのは、恋愛とセットになつた贅沢であるという。大都市に不可欠な劇場やレストラン、衣服や宝飾品といった贅沢品は、すべては恋愛、しかも非合法的な恋愛に對する欲望が生んだものである。光り輝く小間物、すなわち宝飾品を売る

店も、現金は受け取らないが貴金属の装飾品なら受け取るという恋人のために、紳士が買い物をする店として発展したという。

レストランを料理屋や待合茶屋に置きかえれば、花柳界に出入りする男とそこで働く芸者たちの存在が、この時期の貴金属宝飾業の発展を牽引したと言えるだろう。

永井荷風『腕くらべ』に描かれた芸者の装身具風俗

当時の芸者の装身具風俗は永井荷風が大正五、六年に書いた花柳小説にも描かれている。

舞台見物（観劇）をする芸者の身なりを描写した場面にダイヤモンドや真珠の指輪や和装の装身具が登場。一人の芸者の装身具は、「帯留の金具は何やらいわれあるらしい素銅すあかの目貫めぬき、さして大きからぬダイヤにプラチナの指環ただ一ツ、万事目立たずして相応に物のかかったつくり、いずれ何家なにやの誰といわれる姐ねえさんであろう」と好意的に描写。

またもう一人の、目いっぱい飾りたてた芸者については、「宝石入りの帯留、びっくりするほど大きなダイヤに真珠の指環これだけでも千円以上と思われた」と成金趣味の芸者のように描写。

ダイヤ、プラチナという大正期に人気の高かった宝石や貴金属が描かれ、値段まで書き込まれた荷風ならではの小説である。

洋の東西を問わず、宝飾品というものは顕示的消費（見せびらかしのための消費）の最たるものである（ヴェブレン『有閑階級の理論』④）。だが、見せびらかす方法は国により多少の違いがある。荷風も好感を持って描いている前の方の芸者のように、日本ではどちらかといえば飾り立てず、目立ちすぎない抑制的顕示が好まれたように、それにはプラチナが最適の貴金属だったのだろう。

日本ダイヤモンド(株)―初のダイヤモンド専門会社も設立される

大戦景気に沸いた大正六年には、御木本真珠店出身の小林豊造によって日本ダイヤモンド(株)が設立された(図1-2-44)。この会社はダイヤ、ルビー、サファイヤ等の原石を輸入して自社工場で研磨して販売することを目的にしたユニークな会社である。ダイヤモンド加工研磨機などは自身がベルギーから持ち帰ったものを御木本から移譲され、その一台をモデルに十数台ほど作り、それを使った『シキモト装身具100年史』④他。

原石の輸入は大正六年11月で、「ロンドン市エスジョンズを介して豪州シドニーよりダイヤモンド原石二七〇カラット（価格三千五百円）」と「サファイヤー原石（価格五百円）を輸入した」（『ダイヤモンド』④）。日本におけるダイヤモンド原石輸入の最初である。当時としては、これだけの原石を輸入することは容易なことではなかったが何とかやり遂げた。

新会社（資本金50万円）に対する期待は大きく、業界から村松合資会社・村松万三郎（二代目）、山崎商店・山崎亀吉、細沼商店・細沼浅四郎などが株主となり、筆頭株主は御木本真珠店総支配人・池田嘉吉というそうそうたるメンバー（「鏝のあゆみ」④）。

だが、「宝飾用の品は商業需要に応ずるほどの成功は得られず、翌七年にようやくダイヤモンドツール（工具）を売出すに過ぎなかった。しかしルビーやサファイヤーのドリルやダイスを完成した」（『わが組合史』）。

『日本ダイヤモンド工業五十年の歩』には「大正6年末に、日本ダイヤモンド株式会社が、ブリリアントカットに成功した。ダイヤモンド加工技術の萌芽である」と記されている（『ダイヤモンド―浜田義光の半生記』）。だが、商業的に販売されるまでには至らなかったようだ。

小林は不運にも腸チフスにかかり大正十年に48歳で死去した。柱を失った同社は資金面の苦労が続いたが、関東大震災で焼けたダイヤモンドをリカットして利益をあげたことで経営はやっと安定した。このことについては大正後期編でも紹介する。



図 1-2-44

日本ダイヤモンド(株) 広告

大正7年9月『新演芸』より

御木本の小粒ローズカット・ダイヤモンド

日本ダイヤモンド(株)が設立された大正六年頃には、御木本真珠店は養殖半円真珠にローズカットのダイヤモンドや芥子けしをあしらった帯留や首飾り、指輪、束髪くわみピン(簪)、ブローチを盛んに製作したという業界記録が残っている(『わが組合史』)。

ローズカットとはブリリアント・カット以前の旧式のカットである(図1-2-45)。

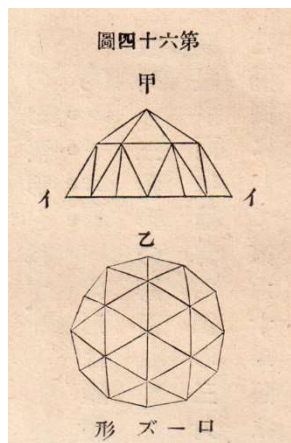


図1-2-45
ローズカットのダイヤモンド
『寶石誌』より
甲は側面図、乙は上面図

確かに、この頃の御木本製品にはローズカットを用いたものが多いが、御木本は以前からメレサイズの小粒のローズカット、あるいはローズカット風不定形カットのダイヤモンドを用いることが多かった。明治末期に作られた御木本初期の束髪簪(その後、帯留に改作される)などを見ると、ローズカットらしきダイヤモンドを埋め込んだものがある(『ミキモト/真珠王とその宝石店100年』)。

とすると、御木本は大正六年以前には輸入されたローズカットを用い、それ以降は日本ダイヤモンド(株)のローズカットを用いたという推測も成り立つ。すでに述べたように大正六年頃にはブリリアント・カットが一応出来ていた日本ダイヤモンド(株)ならローズカットが出来ないことはないだろう。

なお、『わが組合史』にある芥子とは芥子珠ともいう、芥子の種子のように小さな小粒真珠の総称。偶然にできたもの、ビーズが核に密接しなかったためできたものといろいろ。形状は様々だが、装身具にはほぼ真円のものけしきめが主に使われた。御木本では芥子珠を留めることを「芥子定」という。大正と戦時体制期までの御木本の製品に多いが、御木本以外でも使った。

(コラム1-8)

ダイヤモンド研磨業以外の小林豊造の功績

国内におけるダイヤモンド研磨業のパイオニアとして名

を残した小林豊造だが、小林の成した功績はこれだけではなかった。

小林豊造（1874～1921）は御木本真珠店を支えた御木本金細工工場（明治四十年創業）の二代目工場長であり、いわば日本の洋風装身具の開拓者であった。小林は元は東京高等工業学校（通称・蔵前工業）教員養成所金工科の教員であり、明治三十六年8月から三十七年7月までの1年間、文部省囑託として欧米の貴金属装身具業界の視察をした西洋通でもあった。

その小林を御木本幸吉が招いたのは明治四十三年。小林の工場長就任後、御木本真珠店は和洋の装身具に欧米風デザインと技術を加味して業界に先駆けて斬新な真珠製品を世に送り出した。細工品に透かし入りの腰張り様式を取り入れたことや、宝石のきめ込み技術、白金（プラチナ）張り、「御木本の15金」といわれた15金地金の開発も小林の成した仕事である（『御木本真珠発明一〇〇年史』）。

小林豊造はダイヤモンド研磨業のバイオニアであると同時に、伝統的日本の装身具を近代的洋風装身具へと転換させた最大の功労者の一人とっていいだろう。

ちなみに、小林豊造は文芸評論家として活躍した小林秀雄の実父である。



小林豊造
『ミキモト装身具 100
年史』より

大正六年、初の業界団体―東京貴金属品製造同業組合設立

大正前期の大きな業界の出来事として記憶しておきたいことは、好景気を背景に大正六年（1917）、わが国初の業界団体である東京貴金属品製造同業組合が設立されたことである。

正式設立は大正六年だが、すでに大正三年には準則組合が発足し、大正三年12月には組合用刻印2種類が商標登録されている（図1）



図 1-2-46
商標登録（組合刻印 2 種）

『日本登録商標大全. 第 7 輯上』④より

（上）金製品には「金錠」マーク、（下）銀製品には「打ち出の小槌」マーク

組長（組合長）は業界の重鎮である山崎亀吉（1870～1944）（図 1-2-47）。明治三十三年制定の重要物産同業組合法にそって設立されたもので、その特徴は「同業者に対して強制加入の権限を持ち統制力を持っていた」（『わが組合史』）こと。従って当時の有力製造業者のほとんどはこの組合に入っていた。

この組合は貴金属宝飾産業の救済と近代化のために各種の活動をしたことで知られる。

組合が最初に着手した事業は金地金の確保である。

第一次世界大戦中から戦後にかけて、貴金属需要の増大に伴って金地金が不足していた。

当時、日本の産金量は年間 6～7 トンに増加したが、それだけでは激増する金製品の需要は賄えなかった。「多くの業者は、たくさん注文をかかえながら金地金が間に合わないため、手をこまねいていたのであった。そこで山崎氏の組合が主唱して、金地金不足の緩和措置を政府に請願」。その結果、横浜正金銀行からアメリカの金貸の払い下げを受けることによってこの事態を打開した（貴金属製品の民間検定開設とその前後）。こうした資材共同購買事業は産業組合法によって「東京貴金属購買組合」を設け（大正八年）、ここを窓口に行った（『わが組合史』）。

大正の後期になると指輪寸法番型の制定や貴金属製品の品位検定などの画期的事業を実施したが、これらについては大正後期編で紹介する。



図 1-2-47

山崎亀吉

『ダイヤモンドと銀座』

④7より

(コラム119)
「ダイヤモンド」から「ダイヤモンド」へ―大正七年の演歌で普及

大正七年に作られた演歌「金色夜叉」の歌は、演歌師によつて歌われ一世を風靡するほど大流行した。この歌は明治三十年(1897)から新聞小説として発表された尾崎紅葉の小説『金色夜叉』から題材をとったもの。

一 熱海の海岸散歩する
寛一お宮の二人連れ
共に歩むも今日限り
共に語るも今日限り
(中略)

六 ダイヤモンドに目がくらみ
乗ってはならぬ玉の輿たま

人は身持みもちが第一よ
金は天下のまわり物

ここに出てくる「ダイヤモンドに目がくらみ 乗ってはならぬ玉の輿たま」というフレーズは特に有名。乗るなどは言われなくても玉の輿たま、すなわち高い地位の人や財産のある人に嫁とぎた

いというのは女性が望むこと。このフレーズによつてダイヤモンドへの憧れは一層高まった。



演歌師

『演歌師の生活』④より
街頭で、バイオリンに合わせて演歌を歌いながら歌本を売った。女性が手に持つのが歌本（演歌ピラ本）。

また、ここには「ダイヤモンドに目がくらみ」とあるように、ダイヤは「ダイヤ」ヤ「モンド」と表記されている。ところがこの歌の元となった尾崎紅葉の小説中では、古い呼称で

ある「こんごうせき金剛石」が用いられ、そこにはすべて「ダイヤ」ア「モンド」とルビがふつてある。

ダイヤモンドのことを「ダイヤ」と表記するか、それとも「ダイヤ」と表記するかは今でもしばしば話題になるが、大正期には、少なくとも大衆レベルではダイヤモンドと呼ばれることが増えた。その背景として、ここに紹介した「金色夜叉」の歌の影響が大きかったものと思われる。

(コラム1-10-1)

ダイヤの指輪憂いあり―演歌に歌われた悲劇のダイヤモンド

この時代は大正デモクラシーの影響もあり、恋愛と結婚の自由を求める傾向が強まった時代でもある。

演歌に歌われて広まった悲恋の心中事件もあり、その演歌には「ダイヤの指環」の一節も出てくる。

大正六年3月7日夕刻、千葉駅を発車した列車に年若い色の女性が飛び込んで自殺を図った。列車は止まったので同行の青年は飛び込み遅れ、短刀でのどを刺し絶命。女性は一命をとりとめた。

事件はこのようなものだったが、女性は芳川伯爵家の若夫人（芳川鎌子）で、男性は夫のお抱え自動車運転手だったこ

とから恰好の話題となり、新聞が大きく報じ世間を賑わせた。この事件は早速演歌師によって歌われ広められた。その叙事的な歌は次のように始まる。

ああ春浅き宵なりき
恋に悩めるあで人の

真白き指に輝ける

ダイヤの指環憂いあり

(以下略)

「千葉心中の歌」

淡路美月作詞

演歌では指輪は「ダイヤ」となっているが、新聞報道によると実際は「真珠」だった(大正六年3月8日『東京朝日新聞』)。どうして真珠がダイヤになったのかは不明だが、ダイヤの方が事件のインパクトと悲劇性を伝えるのにふさわしかったのかもしれない。

(コラム1-10-2)

大正八年、宮沢賢治、宝石商を計画

宮沢賢治は、「雨ニモマケズ：」や「銀河鉄道の夜」などの作品で広く知られる詩人であり童話作家。

もう一方で賢治は、「石ツコ賢さん」と呼ばれるほどの鉱物好きであり、本気で宝石業の経営を計画していた。

鉱物から宝石へ興味が移ったのは妹の看病のために上京した時に神田で宝石の原石を扱っている水晶堂や金石舎などの鉱物・宝石商を見つけてから。大正八年1月には父親に宝石商になりたいという計画を打ち明ける。

宝石商といっても賢治が目指したのは宝石の加工や合成宝石の製造である。「この仕事を始めるには只今が最好期」である。なぜなら「経済の順況、外国品の競争少き為」と父親に出資を仰いだり、良い返事はもらえなかった。そのため結局はこの計画は挫折した。

賢治の宝石店は陽の目を見なかったが、この頃より文学作品の中には多くの宝石が登場するようになり、作品に独特の彩りを与えるようになる(『賢治博物誌』④他)。

賢治の夢が実現していたら、どんな宝石店になったのか、

興味は尽きない。

業界にも吹き荒れた大正デモクラシーの嵐―御木本工場のストライキ

第一次世界大戦で宝飾業者は利益を上げたが、多くの庶民は破産だ失業だと生活苦におびやかされていた。

一方で、ロシア革命（1917）が労働者を鼓舞し、吉野作造は「民本主義」を提唱し社会を刺激していた。米騒動が起き、労働運動も活発化していた。

こうした背景があつて、大正八年2月、御木本の工場（御木本貴金属工場）では、全従業員が待遇改善、経営刷新、工場長排斥を求めてストライキに入った。

新しく工場長になったのは斎藤信吉。斎藤信吉は当時熱心なクリスチャンで、週給制や実働8時間の労働体制を始め、厚生関係の工場改革を矢継ぎ早に行つたため事態はどうか収束した『夢を食いつづけた男』^{⑤①}（他）。

御木本の争議は、労使間紛糾を回避した労資協調の模範工場として、内務省社会局によつて『新らしき工場経営法（革新せる御木本貴金属工場）』（大正十一年）としてまとめられ、全国の工場に配布された（図1-2-48）。

なお、斎藤信吉（1877～1945）（図1-2-49）は御木本幸吉の実弟である。大正八年に貴金属工場の工場長になり、また東京労働教会を創立してキリスト教による労資協調をはかり、工場改革を成した。

その後神戸に移り、仲間と労働文化協会を創り、大正十三年には神戸労働学校を開設し学監となった。御木本には異色の人物が多いが、斎藤信吉も特異な存在だった『画報日本近代の歴史8 民本主義の潮流』^{⑤①}。



図 1-2-49

斎藤信吉

『画報日本近代の歴史 8 日本主義の潮流』より

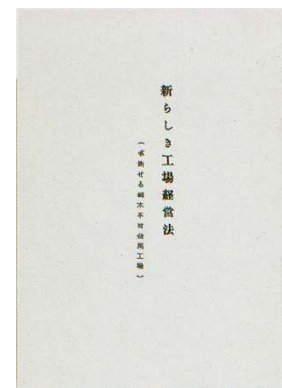


図 1-2-48

『新らしき工場経営法』
『輝きの世紀』⁵²⁾より

ひすいの原石輸入の試み

ひすい（ジェイダイト）は人気の高い宝石であった。ダイヤモンド、真珠に次ぐ人気だったといっているだろう。そのためひすいの原石の輸入を試みた人がいる。

大正八年（1月～4月）、日本ダイヤモンド（株）の小林豊造は、中

カントン

国の広東でひすいの原石を当時の金額で一万円で購入し、東京に入荷。自信を持って買ったものの「切断して見ますれば結果は意外に悪しく外皮のみ青緑色有して居りますが、中味は白色に青緑の斑点状を呈して居る位にてとても想像もつかぬ有様で夢は覚めていかに損害を少なくするかの問題が残させられた」⁵³⁾ 『ジェードと商品知識十対三』（第一巻）。

結局このひすい原石輸入は大失敗で、置物や、一部は指輪用、カフスボタン用に研磨したものの宝石として使えるものはわずかだった。どうして、ダイヤモンドだけでなく宝石全般への知見も豊かなはずの小林豊造は失敗したのか。

それは、ひすい原石の良否の判断は極めて難しいというところにある。中国で取引されているビルマ（現ミャンマー）産のひすい原石の多くは、外皮は鉄分の褐色や灰白色で覆われている。一見すると河原にころがっている石とさほど変わらない。これでは原石の良

否は分からないので、販売する側は、外皮一カ所に窓と呼ばれる中が見える箇所を作る。買う側はここに水をつけ、その良否を判断する。

このひすい原石の良否の判断は経験を要する難しい作業である。なかにはその部分を着色して良質のひすいの原石にみせかけたものもあったといわれる。博識の小林にもそこまでは見抜けなかったようだ。

その後、大正十二年頃には、またひすいの原石の輸入を試みる人たちが現われ東京牛込に「東洋宝石舎」という会社も設立されたが、こちらにも成功には至らなかったと伝えられる。

ファンシーカットとファンシーカラーのダイヤ

大正前期の最後の頃にはすでに変り形、すなわちファンシーカットのダイヤモンドも売られていた(図1-2-50)。

高級宝飾品店と知られていた丸嘉が扱ったもので上3点の指輪には角形(バゲット)、ドロップ形、マルキース形(マーキーズ)。下2点の短鎖には、角形、ドロップ形のダイヤモンドが使われている。いずれもブリリアント・カット。

丸嘉のような店は他にもあったらしく、こんな早い時期に日本人がファンシーカットのダイヤに興味を持ったことは「海外の宝石会社を感心させた」『あなたの宝石』⑤4という。

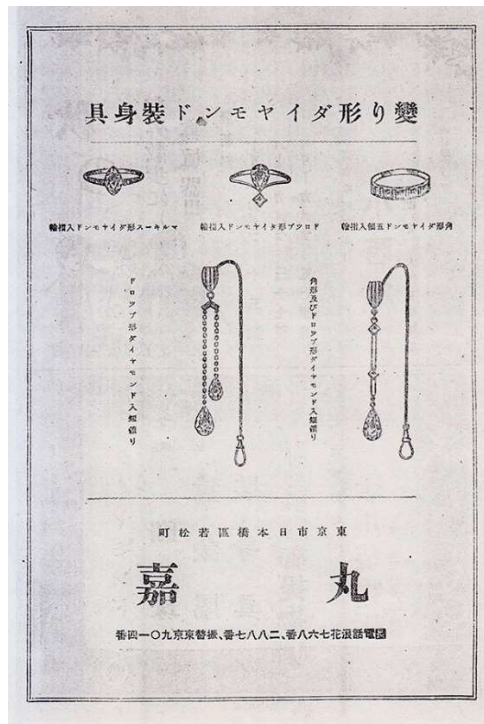


図 1-2-50
変り形ダイヤモンド装身具
丸嘉
大正 8 年 11 月『演芸画報』より

大正前期にはファンシーカットのダイヤだけでなく、ファンシーカラーのダイヤも人気だった。記録によると、「ピンク、ブルー、ブラック・ステール等の変わり色にも、みんなの心が集まった(中略)

ダイヤモンド自体にはなじみが薄いとはいえ、より美しい輝きを求める日本人の感覚意識を世界の宝石会社に周知させる好材料になった」(『あなたの宝石』)。

ファンシーカットやファンシーカラーのダイヤがどの程度普及していたかは別としても、こうしたダイヤに興味を示す業者やユーザーがすでにいたということは確かだろうだ。

日本で貴金属宝石店がダイヤを扱いだしたのは明治中期から(『日本の宝飾文化史』8A-1、8A-3)。それからわずかな期間でここまでダイヤに対する興味が広がり、センスが向上した人々が出ていたのである。

ちなみに、ファンシーカラーのダイヤについては、東京国立科学博物館に戦時期に供出されたカラー・ダイヤモンドの標本がある。その中にはこの時期のものも含まれているかもしれない。

大正八年頃の真珠の大きさは？—中心は5ミリ台、最大でも6ミリ強
ここで、養殖真円真珠がある程度まとまって出始まった大正前期最後の頃の真珠玉の大きさについて見ておこう。

養殖真珠の玉の大きさは、使われている装身具の時代推定の大きなポイントとなるので、様式や地金素材だけでなく、その大きさにも注目したい。

大正八年(1919)、大阪堺市の浜寺で初めて養殖真円真珠の入

札会が開かれた。出品は高知県宿毛の予土水産。この真珠を作り出

したのは「西川式」特許の普及に貢献した藤田昌世で、藤田の真珠は5ミリ台が中心で6ミリ台も少しあった。現在の真珠と比べるといかにも小さいが、これでも当時としては大粒で、「これほど大きい真円真珠がまとまって売り出された例はなく、日本中の真珠業者を驚かせる事件となった」(『真珠の世界史』)。

この時の真珠は、『日本真珠産業論』⁵⁵によると6ミリ台とはいっても最大でも6.6ミリの真珠しか出来なかった。大正八年に6ミリ強だった玉の大きさは、その後、少しずつ大きくなり、大正十二年には最大8ミリ、昭和十二年は最大で10ミリのものまで作り出せるようになった(図1-2-51)。

年次	最大重量 g (1個当たり)
1919 (大8)	0.45g (6.6mm)
23 (12)	0.75 (8.0)
28 (昭3)	0.86 (8.4)
32 (7)	1.21 (9.5)
37 (12)	1.69 (10.0)

図 1-2-51

大正8年～昭和12年の最大真珠の重量と直径
『日本真珠産業論』より

真珠の大きさは、使用する核の大きさとも密接に関係するが、この時代の核は直径一分ぶ(約3ミリ)に過ぎなかった(大正十五年には二分以上が多く使われた)、『日本真珠産業論』。

地域産業動向①—さんご産地の彫刻技術の進展

さんごの玉簪や根掛玉は大正期になっても日本髪わづらひの飾りとして人気の高い装身具であった。さんごはダイヤやプラチナの装身具とは違い、一部の富裕層だけではなく多くの女性が髪飾りとして用いた。ところが日本には丸玉加工の技術者は多かったがさんご彫刻の技術者はいなかった。そのため、彫刻されたさんごを用いた帯留や髪飾りは発達していなかった。

そこで水産講習所では、これまでであった貝殻彫刻専修のコース(明治四十二年開設)を大正二年(1913)に「珊瑚彫刻専修」と改め、本格的にさんご彫刻技術者の養成をはじめた。その後コースに変更はあったがさんご彫刻技術者の養成コースは大正十三年まで続き、その間42名の修業生を送り出している。この修業生は長崎、高知などのさんご産地や集積地でさんご彫刻をはじめた。

またさんご産地の五島(長崎県)では大正五年から七年にかけて、農商務省を通じて、水産講習所から講師を招きさんご彫刻の講習会を開いている(『珊瑚—海の宝石その魅惑—』^{⑤6})。

こうしたなかから育った技術者によると思われるさんご彫刻の帯

留(図1-2-52)や束髪簪(図1-2-53)が大正五年頃から少しずつ売りに出された。ただし、さんご彫刻の装身具が本格化するのは昭和初期になってからである。



図 1-2-52
さんご彫刻帯留広告
白牡丹本店
大正5年12月『演芸画報』より



図 1-2-53
さんご彫刻束髪簪広告
白牡丹本店
大正5年12月『演芸画報』より

地域産業動向②―甲府の貴金属工芸と水晶細工

好景気は甲府にも波及していた。

甲府の貴金属工芸は第一次世界大戦後、大戦景気の波に乗り盛況だった。これまでの地金素材は銀や真鍮、洋白(洋銀ともいわれる銅にニッケルなどを加えた白色合金)が中心だったが大正五、六年頃から金の使用が急増し、金指輪、懐中時計用金鎖などの注文が殺到し、少数の業者では応じきれないほどだった。

機械化も進み、大手の保坂貴金属店では大正五年に県下業界のトップをきってプレス機や圧延ロールなどを導入し量産体制を整えた(『水晶宝飾史』⑤7他)。

このように貴金属工芸は盛況だったが、甲府本来の産業である水晶細工は苦戦を強いられていた。

水晶細工は江戸時代末期から甲府の特産品として知られ、庶民の宝石として明治期には和・洋の様々な装身具を全国に供給してきた。ところが大正初期になると極度の原石難にみまわれ、水晶業者はピンチに陥った。明治中期からの乱掘で水晶は掘り尽され、また四十年の大水害により各河川沿岸の開墾が禁止されたためである。明治末期からは国内地産や朝鮮産のアメシスト原石なども移入したが、数量は少なく、たちまちのうちに使い果たしてしまった。このピンチを救ったのは世界有数の水晶産地である南米ブラジル産の水晶である。

ブラジル産水晶は、大正七〇八年、東京神田に設立された三栄貿易商会を通じて甲府の業者へ供給された。この時の原石はニューヨーク経由のものであったが、すぐに、他の貿易会社を通じてブラジルから輸入するようになった。この時期に、甲府では産出していなかった紫水晶や黄水晶、茶水晶なども輸入された。

やがて直接輸入も始まり、大正九年以降は直接輸入量が増加。この原石を使って、大正末期（大正十四年）には水晶のネックレスが作られ輸出の花形となった（『水晶宝飾史』）。

地域産業動向③―若狭めの細工

めのう（アゲート）は水晶と並ぶ庶民の宝石として、簪の玉などに幕末以来用いられ、大正期にも束髪簪の飾りや帯留の石として愛用された。指輪の石としても用いられ6月の誕生石となっている（図1-219）。

めのう細工は古くから若狭（福井県）や松江（島根県）の特産品として知られるが、大正期になると北海道後志産シッペシのもので各種装身具が作られた（『寶石誌』）。

めのうは採掘したままの生の原石はほぼ乳白色だが、これを火入れ（加熱）することによって赤味や黄色味のある部分を赤くして赤めのうを作ることができるが、若狭ではこの方法をすでに江戸時代の享保年間（1716〜36）には確立していた。

甲府で赤めのうが作れるようになるのは昭和初期になってからである（『水晶宝飾史』）。